第 224 号　令和 8 年 1 月 23 日発行

中田かわら版　2 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会　　協力：中田連合自治会　泉区役所
制作：中田かわら版制作編集委員会　　横浜市踊場地域ケアプラザ

■この人に会いたい〈83〉

「オカリナの奥深い世界」

國谷　雅代さん　　60 歳　（宮の台）

「オカリナに出合って、15 年過ぎました」と、明るく語る國谷（くにや）雅代さん。その出合いのきっかけは 20 年前にさかのぼる。子育ても落ち着きヘルパー2 級の資格を取った。タイミングよく医療生協「中田診療所」が開設したディサービスでヘルパー募集の広告が目に止まり、早速応募。それから週 2 回の仕事を楽しみながら、介護福祉士の資格も取得した。「中田診療所は、公私ともにお世話になって、今の私があるんです」と、言い切る國谷さん。そして「オカリナとの出合いもここなんです」と話が続く。当時の看護師長さんから「オカリナの先生を知っているので、サークルを立ち上げたい。一緒にやりませんか？」と声をかけられ、楽器のことは何も知らないまま始めることに。当初、練習場所も中田診療所で月一回の練習が始まった。今では中級の腕前で法螺貝ほどの大きなオカリナもこなしている。

■　　■

雅代さんは東京生まれ、音楽好きな家庭に育ち、ピアノを 6 歳の時から習い始めた。8 歳の時に神奈川県綾瀬市に移ってもピアノは高校まで続けた。「中学と高校では吹奏楽部に入り、クラリネットを吹いていました」と音楽との縁が続く。さらに「私の性格は始めたら続ける事」と穏やかに話す中にシンの強さがのぞく。

就職は地元でしたいと、綾瀬市内に研究所のある会社に。そこでご主人と出会って 24 歳の時結婚。実はご主人の海外転勤が決まったため急遽結婚式を挙げたとのこと。新居はアメリカのオハイオ州だった。息子さん 2 人はそこで生まれ、長男が 4 歳の時帰国。雅代さんの性格から「楽しい 5 年間でした。日本人も多かったので、英語はほとんど使わないで済みました。だから全然英語はできないんです」と明るく笑う。帰国後は今の「宮の台」に。両親の住む敷地内に新居を構え、定住している。そこでも、子供の通った小中学校の PTA コーラスのグループに所属し、今も続いている。

「オカリナを始めて、楽器の奥深さにびっくりしました。吹き方で音色が変わり、息の強さや息の入れ方で音程を一定に保つことがとても難しい楽器なんです。オカリナの種類も大きさも多種あって、大きくなるほど低音になります」と説明に熱が入る。

材質は主に陶器で「最近購入した“淡路島”の土で作られたオカリナが気に入っています。これからも演奏のジャンルは問わずに、いろいろな曲に挑戦していきたい。さらに上級を目指し、仲間を増やして地域の方々にオカリナを知ってもらいたい」と、声がかかると多種類のオカリナを持って出かけ、客層に合わせて曲を選び、演奏をしている。穏やかに語る雅代さんを、これからも応援したい気持ちにさせてくれた楽しいひと時でした。　　松本　純子

記事にある情報をより詳しく知りたい方は、踊場地域ケアプラザ　嶋（しま）まで問い合わせください。
TEL　801-2114　FAX　801-2923

“中田のトム・ソーヤ„は愛と勇気を語った

佐々木弘美さん　元中田連合自治会副会長　令和 7 年 11 月 28 日死去、87 歳

悼む

平成 14 年に望月榮さんが連合自治会会長になられた時を同じくして佐々木弘美さんも副会長になられた。令和 3 年に望月さんは 87 歳で、令和 7 年に佐々木さんも 87 歳で逝去されたことは偶然とは言え余りにも早すぎました。

秋田市出身の佐々木さんは名門秋田工業高校ラグビー部で活躍後、日本を代表する企業「日本鋼管」に就職、保全課（安全管理）の業務を務めあげました。昭和 40 年頃、中田に定住。会社を退職後は奥様ミキ子さんとのトム・ソーヤ的活動が開始されました。

「トム・ソーヤ」はマーク・トウェイン原作の小説である『トム・ソーヤの冒険』の主人公でミシシッピ川沿いの村に住む冒険好きでいたずら好きな少年のこと。1876 年発表。とある。（スマホ検索）

先ず、西が岡コミュニティでの蕎麦打ち会を夫婦で受講。やがて畑を借りて蕎麦の栽培を始める。作業小屋を建てる。名前を「富夢創家」トム・ソーヤ。大きなビニールハウスも建てた。仲間が増えた。バーベキューもした。蕎麦の実は製粉して打った。石臼も製粉機も蕎麦打ちに必要な全ての道具を揃えた。いつもミキ子夫人が傍に居た。これらの道具は決して安くはない。雨の日、風の日、灼熱の太陽の日も二人して頑張った。9 年前、最愛の奥様に逝かれた。その時奥様は 76 歳。こんな思いっ切り面倒で難しい事を始めたのはラグビーの影響だろうか。勇気？頑固？

佐々木さんは「かわら版編集委員会」の委員長をされていた平成 29 年に、筆者は同委員会に入りました。「松本さん、奥さんを大事にしなさいよ」と言われ始めました。「ハイ、大事にしています」と応えました。10 分後に又、言われました。又、応えました。後に 1 年前に奥様を亡くされたことを知りました。お酒を飲んでも飲まなくても何べんも佐々木さんは言いました。10 回以上で数える事を止めました。

沢山の趣味をお持ちの佐々木さんは中でも 2 点、紹介したい。毎年の賀状は木彫りの歌麿風版画です。（写真）もう 1 点は膨大な量の日記風記録誌です。原稿用紙換算すれば 500 枚以上でしょう。内容は奥様との思い出が殆んどのようです。（お嬢さん談）

「和の会」館長を歴任するなど地域の福祉や健康の為に第二の人生を送られた佐々木さんは、奥様のいない 9 年間もより懸命に勇気と愛情を地域に注いできました。「蕎麦打ちの会」はしっかりと中田に根付いています。昨秋も 92kg の過去最高の収穫を得ることが出来ました。謹んでご報告を申し上げます。

今年も来年も中田の「富夢創家」の跡地に、風が吹けば笑う様な真っ白な蕎麦の花を咲かせます。高いところからどうぞ心行くまで眺めてください。

松本　正

編集後記

横浜市が「ヨコハマあんしん登録」という事業をスタートしたのをご存じですか。65 歳以上の市民が緊急連絡先やエンディングノートの保管場所などの個人の情報を市に登録できる制度で、病気や事故の際には登録した内容が警察や消防、医療機関に伝わり、意思決定が尊重される仕組みです。福祉政策の登録制度ですが、災害時にも生かして災害関連死の防止などにもつながると受け止めており、防災活動の取り組みでも登録者数を増やす活動を通して、日ごろの顔の見える関係づくりを進めたいと思っています。

鈴木　賀津彦

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会
委員長　宮田貞夫　　編集長　松本 正
編集委員；小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋　宏之